

第137回くらしの植物苑観察会 2010年8月28日(土)

芸をする朝顔

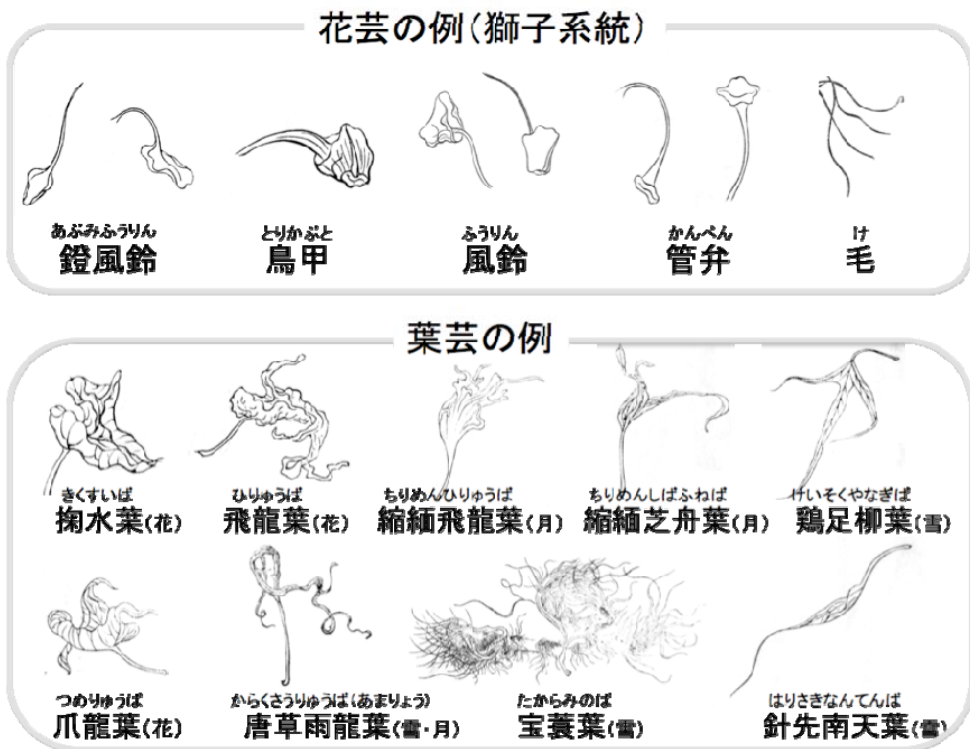
仁田坂 英二(九州大学大学院)

形の珍奇さを競う変化朝顔(へんかあさがお)において、花や葉の変わった度合いが高く鑑賞価値が高いことを「良い芸をしている」と表現していました。また葉、花、それぞれをさす場合は、葉芸、花芸とよんでいます。花卉や葉が一定の鑑賞価値の高い形を表現するものは「風鈴」、「鳥甲」、「雨龍葉」、「芝舟葉」など、固有の芸を示す用語で表記されます。

江戸期に変化朝顔が生じて、鑑賞されるようになった当初は、ジャンルを絞らず、より珍奇かつ豪華なものを競っていましたが、明治後期以降、変化朝顔が復興し各地で愛好会が結成されると、次第に審査対象が獅子咲(獅子の部)、獅子牡丹(花の部)、采咲牡丹(雪の部)、車咲牡丹(月の部)の4部門に絞られ、厳密な採点基準に基づいて花の優劣が評価されるようになりました。評価された主なポイントは、花や葉の芸のレベルが高く、かつ揃っているという点で、このような一見矛盾した基準を満たす花の出現頻度は自ずと低くなります。例えば、全ての花卉が「風鈴」という花芸を持ち、揃っている場合は、「総風鈴」と称し高い評価を与えました。

獅子咲を例にとると、江戸時代の文化文政期に記録されている獅子は乱獅子と呼ばれる、花卉切れて折り重なる程度の種のできる正木でしたが、より鑑賞価値の高いアサガオを追い求めた結果、花卉が細い管状になり、風鈴や管弁という花芸が確立し、その結果、獅子は種のできない出物となりました。また、葉型もより抱えの強い、複雑な形のものになっています。最近の研究から、これらの4つのジャンルの主要な変異である獅子、柳、縮緬葉台咲、および、修飾変異としての牡丹、立田、笹の他に、芸に関わる重要な遺伝子に斑入と連鎖した打込(うちこみ)や獅子と連鎖した管弁化変異があることが明らかになってい

ます。
今回の観察会では、このように、朝顔の鑑賞価値について考えてみたいと思います。また暮らしの植物苑に展示されている変化朝顔についてもこのような鑑賞価値の観点から解説を行います。



岡不庵(1902) あさかほ手引草より抜粋

次回予告

第138回くらしの植物苑観察会 2010年9月25日(土)

「江戸時代のバラ」 御巫 由紀(千葉県立中央博物館)
13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要